

比較文化Ⅱ [第3回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●カラーシャの暮らしの変遷

◆1960年代から外の文化（近代文明）が入り始める

1960年代は、ヒンドークシュ山脈の登山の帰りなどに立ち寄る限られた人たちだけ
70年代半ばに道路（四輪駆動車が通れる道）が南のビリウ谷に開通し、少しずつ外部の文化が入り始める

珍しい民族衣装や独特の習俗などで次第に「秘境」として知られるようになり、フランスやアメリカ、イギリスから観光客のツアーが訪れるようになる

踊りを見せてお金をもらい、写真1枚撮るのにもお金をせびるようになった
文化人類学者や民族音楽学者がきて、高額な謝礼を払う

「俺たちのことを書いてお金や名誉を得るのだから、金を払うのが当たり前だ」

このひとことにこだわり、これまで「プロ」としてカラーシャに関わらなかった
クリスチャンのミッションが、優秀な少年を町に連れていって教育を受けさせることも

◆最初の滞在（1978）の頃はほとんど自給自足の暮らしだった

1977年に山越えルートでムンムレット谷にジープが行けるようになる（冬季は閉鎖）

ムンムレット谷にツアー客や貧乏旅行者が行くようになった

78年当時はマッチさえも貴重だったし、みんなからタバコをよくねだられた

炉端で小さな火を燃やして明かりにするため、煤で家の中も人の顔も真っ黒

当時最高だった100ルピー札がなかなか受け取ってもらえない（現在は5000が最高）

事前に都市部で両替して、1・5・10ルピーの分厚い札束を持ち歩く必要があった

◆1980年代から次第に貨幣経済に巻き込まれた

ソ連のアフガニスタン侵攻（1979～89）で、アフガン難民がチトラルに流入

食料が不足し、自給する分として作っていた作物が高く売れた → 換金作物

薪ストーブが入り、煤に悩まされなくなったが、その代わりに石油ランプが必要に

石油を買うのにお金がいる → ますます貨幣経済が浸透

●援助が文化を変えていく

◆1980年代後半から、さまざまな援助が入り始める

中央政府・州政府の援助はうまくいかなかった

まず行政が援助金の大半をピンハネし、さらに少なくなった予算を地元の有力者である「請負人（ティカダール）」が受け取って私腹を肥やす

いつまで絶っても完成しない水路や道路。提供された援助金が消えていく

観光客目当てに、近隣のイスラーム教徒のホテルが次々と建てられた

教育を受けた若者たちも農業や牧畜を毛嫌いして、ホテル経営に乗り出す

素顔をさす女を拝みに、パキスタン人の若者たちが押し寄せ、トラブルが頻発
外部に働きに出た出稼ぎ者を中心に、イスラーム教への改宗も相次ぐ

◆80年代半ばから、国会議員選挙の買収合戦が始まる

パキスタンの国会（下院）に用意されたマイノリティのための1議席

カラチに拠点があるゾロアスター教徒の候補者による買収合戦

ビール工場主vsホテル王の選挙戦で、親兄弟が派閥に分かれ、憎み合う

◆NGOによる援助の開始

1980年代前半にクリスチャンのミッションが、ある村だけに電気を引く

1980年代後半から、イスマイリ派のアガ・ハーン財団の援助がチトラルに入り始める

90年頃にダイアナ妃がチトラルを訪問し、イギリスの巨額な援助が入る

1990年代半ばに、カラーシャ谷に住み着いた日本人のわだ晶子さんが、日本大使館の援助を得て、自分の住むルクムー谷と南のビリウ谷に電気を引く

丸山のフィールドであるムンムレット谷は、ようやく90年代末に電気が引かれる

◆価値観の変化が始まる

「お金は稼ぐものではなく、分配するもの」という観念が広まる

パキスタンの共通語である、ウルドゥー語のできない老人たちの力が弱くなる

街に出て外の世界で教育を受けた、ウルドゥー語のできる若者たちが力を持つ

共同体の人間関係をとりまとめる旧来の政治力よりも、政府の役人と交渉する＝金を取る能力が重要

みんなの話題は、お金の分配のことばかりになり、氏族・家族・兄弟がばらばらに

●巨額の資金が流入したギリシャの援助

◆90年代半ばからギリシャのNGOの援助が入り始める

カラーシャは、アレキサンダー遠征軍（B.C.327年）の末裔であるという伝承をもつ登山に來た高校の教師が、自分たちの「片割れ」を“発見”してNGOを立ち上げる
 青年や子供たちをギリシャに連れていってテレビに出演させ、募金を展開
 カラーシャはギリシャ人の子孫であると、歴史を改変
 少しずつ援助の輪を広げて、ほかの学校にトイレや水飲み場を作る
 鉄筋3階建ての巨大な「博物館」（寄宿舎や診療所も併設）も完成（2005）

◆里親制度（フォスターペアレント）を募り、奨学金を出す

一人の子供に、公務員の給料より高いお金を出した
 生まれたばかりの赤ん坊にまで奨学金が出る
 奨学金として溜めておかずに親が使ってしまう、新しい家がどんどん建ってしまった
 管理がずさんで、実際の使われ方をよくチェックしなかった（その後、是正された）

◆莫大な資金が投下されていることが、チトラル中の話題に

「なぜカラーシャだけが優遇されるか」と周囲のイスラーム教徒たちの嫉妬を生んでいる
 バザール（市場）に行っても、みんなが援助の金額を噂にしているほど
 2009年9月、中心人物がアフガニスタン側の武装勢力に拉致され（身代金200万ドルと過激派指導者の解放を要求）、ようやく2010年4月に解放された
 現在、アフガン側の過激派がチトラルに流入しているため、外国人の立ち入りは制限され、護衛の警官付きでわずかな日数認められる状態

◆カラーシャ社会での援助活動は難しい

あまりにも援助が当たり前になり、カラーシャに直接的に利益をもたらさない者には、批判の声が寄せられるようになってしまった
 莫大な資金が投入されてきたため、草の根のささやかな援助は馬鹿にされる
 若い世代に権利意識が強く目覚め、マイノリティであることの示威行動が目立つ
 周囲のイスラーム教徒からは大きな反感を買っている
 若い女性が民族衣装のままバザールを歩き、ジープを乗り回す

村でも電波が届く時代になり、ケータイを持っている若者も増えてきている

女であることを武器に、州政府高官や大富豪と親密な関係になり、巨大な家を建てたり、援助の金をせしめたりする女性も出てきた

人間関係が複雑に絡み合う

誰かの利益が、誰かの不利益になり、全員の期待を満たすことはできない

わだ晶子さんのように、地元で腰を落ち着けなければ、とうてい援助活動などできない

●草の根援助の実践——カラーシャからチトラルへ

◆Mihoko's Fundの誕生

「美穂子基金」（西山美穂子寄付金）の話が持ち込まれる
 故・西山三千樹氏（財団法人 日本・パキスタン協会元専務理事）の夫人
 かつてパキスタンに17年間滞在
 パキスタンの子供と女性のために、使って欲しい
 日本・パキスタン協会のプロジェクトとなる

◆Mihoko's Fundの経緯

▼1999年秋

チトラルの王族のジャマール夫人が、私立の小学校をつくる
 チトラル南部のドロシュ地区シャイニガール村
 女性の教師を養成するための学校「Community School Shainigar」
 情操教育のないパキスタンでも、ぜひ音楽の授業をやりたい
 楽器や教材、文房具を持っていき、音楽の授業を実践

▼2001年秋

校庭に、プレイグラウンド（フィールドアスレチック）を造りたい
 「造ってくれるのではなく、自分たちに造り方を教えて欲しい」
 日本人建築家2人に同行してもらい、地元の大工・職人を指導して遊具を7つ製作
 9.11同時多発テロでやむなく、途中帰国

▼2002年秋

遊具の補修と、前年やり残したことをやる

人気のない遊具を撤去し、新しい「危険な」遊具に

日本の紙芝居を持参して上演、母親参観日に劇の上演も

カラーシャの村でも、紙芝居上演を実施

長老による早朝の物語の授業を支援

ペシャワール近郊の部族地域の女子校にも、遊具ができる（→次週）

パシュトゥン人のアスマット・ウラー氏の資金

▼2004年秋

ドロージュとルクムー谷で「お絵描きワークショップ」を实践

パキスタン人女性画家にイスラマバードから同行してもらう

ノーベル平和賞候補にもなったフォージア（Fauzia Minallah）さん

ドロージュとムンムレット谷で「デジタルカメラ教室」を实践

キヤノンマーケティングジャパンの支援でカメラとプリンターを借りていく

男子禁制の「女性のための店」を取材

外に出られないイスラームの女性対象の雑貨屋

アスマット・ウラー氏の資金で、部族地域にさらにもう一つプレイグラウンドを造る

▼2005年末

Community School Shainigar閉校

欧米の援助で、欧米風（キリスト教的）教育をしていると、噂が蔓延

卒業生を他の中学校・高校が受け入れてくれない

カシミールの地震（2005.10）で、援助のお金がこちらにこなくなってしまった

手のひらを返すように、優秀な生徒を欲しがり、転校が可能になった

◆いまになって思うこと

ジャマール校長と個人的に親しく、その意向に沿いすぎて、現地の事情など、冷静な判断ができなかった

こちらのスタッフが女性主体で、女性目線で進めたため、地域の保守的な男の動きに注意が行かなかった